

## 農に吹く風は

萬田正治

以前、お坊さんと一緒に講演する機会があり、そのお坊さんが先に壇上に上がりました。垂幕に書かれた私の名前を指して、「この方は萬(よろず)の田んぼを正しく治(おさ)めると書く、まるで農業の申し子のような方だ」と、しかも「この名前を授けたお父さんが偉い」と言いました。しかしこれは少し違います。私の父は「これからの日本は工業立国であり工業の方を勉強しろ」と言って、私が農学の大学へ行くことを大反対した人ですから、絶対にそんなつもりでつけた名前ではないと思います。しかし今はこの名前を頂いた事をありがたく思っています。生まれて67歳になりますが、ただ一筋に農業の道を歩いてきた人間です。

本日の演題は『農に吹く風は』となっています。風という言葉を象徴的に使いながら、日本の食糧・農業・農村を振り返るとともに、これからどうしていくのかという話をしたいと思います。

戦後64年になります。その間、我が国の食糧と農業や農村に向かって吹いた風は、残念ながらことに強い向かい風でした。強い向かい風とともに私も生きてきました。故に私の人生は誠につらく暗い人生であったと思います。

まず強い向かい風の中で食はどうなってきたか。我が国の食料自給率は、かつては70%もあったのが、右肩下がりに下がってきて、今や40%を割ろうとしています(表1)。40%という意味は、我々が1日に3回食事をしたら2回は他国に依存しているということ、また胃の3分の2は外国人に握られているということになります。痛いとは本当は思わなくてはなりません。農地面積で言えば、日本の農地面積の約2倍以上を他国に借地しているということになります。最近、40%と言うのが問題だということになってきて、食糧自給率を上げようという世論が高まっています。40%という数字自体はもちろん危機的ですが、私が皆さんに申し上げたいのは、他の先進諸国が現状維持か右肩上がりで上がっているのに対して、わが国だけが右肩下がりに下がってきていることに本当の危機があるということですから、ここを見逃してはいけません。

表1 世界一流の食糧輸入大国となった

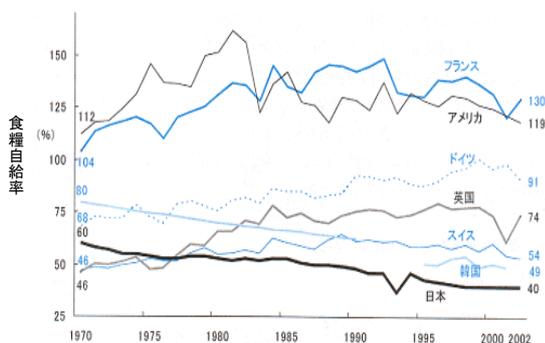


表2 都市圏の食糧自給率

区分	自給率(%)	区分	自給率(%)	区分	自給率(%)
北海道	179	石川	51	岡山	41
青森	127	福井	67	広島	25
岩手	111	山梨	21	山口	37
宮城	85	長野	53	徳島	47
秋田	168	岐阜	26	香川	39
山形	132	愛知	14	高知	45
茨城	73	三重	41	福岡	21
栃木	78	滋賀	53	佐賀	84
群馬	36	京都	14	長崎	47
埼玉	13	大阪	2	熊本	62
埼玉	32	兵庫	18	大分	54
東京	1	奈良	16	宮崎	66
神奈川	3	和歌山	31	鹿児島	83
新潟	92	鳥取	63	沖縄	35
富山	76	島根	67	全国	41

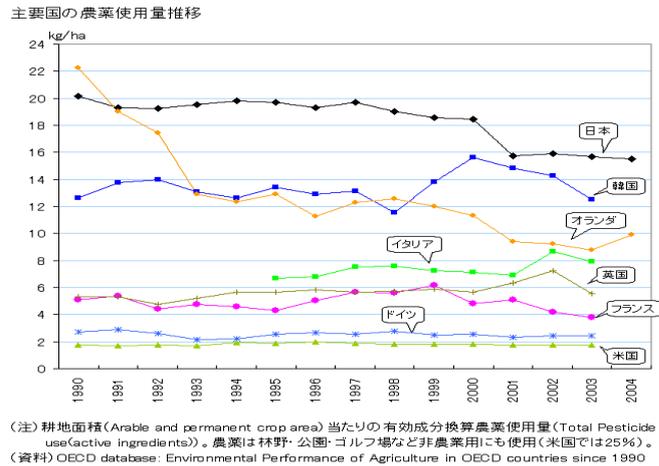
面白いデータが出ました。都市圏の食料自給率です(表2)。東京は1%です。大阪が2%、神奈川が3%です。大都市は完全に食の自給能力を失ってしまっています。東京は食料に関

しては自立できない都市なのです。このことをどれだけの人々が認識しているのでしょうか。

食の安全性が崩壊してきました。とうとう心配した通りになってきています。一つは残留農薬の問題です。中国の生餃子事件、あるいはミニマムアクセス米の汚染米に象徴されるように、依然として残留農薬に脅かされています。2番目に食品添加物です。これらも氾濫しています。3番目に今騒がれている人畜共通病という問題が起きてきています。かつてはBSEいわゆる狂牛病騒ぎがありましたが、今は鳥インフルエンザ問題です。4番目が偽装表示です。偽物商品が氾濫しています。これは昔からあった話で、まだまだたくさんあります。今出てきたのは氷山の一角にすぎません。

農薬のことをもう少し話しますと、農薬使用量は依存として我が国が世界一です(図1)。確かに環境問題が出てきて少しは下がってきましたが、依然として世界一です。次いでお隣の韓国。中国のデータはありませんが、中国がどんどん伸びてきていずれ我が国を追い越すのかなという状況だと思います。いずれにしても日本が農薬使用大国である事に変わりありません。

図1 各国の農薬使用量の推移

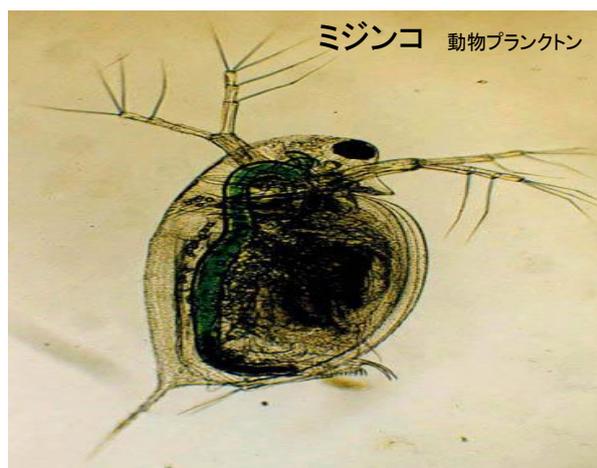


私の近隣の農家はよく農薬をふります。今年は特にふりました。秋ウンカのためです。秋ウンカが今年は異常発生するということで、みんなガンガンふりました。わりと農薬に対して無防備です。さらに言えば私の家のことは何も考えてくれない。風が吹いてこっちまで入ってきます。ニオイでわかりますから、食事時では慌てて窓を閉めます。正直言って私も農村で暮らしていますが、予想していた以上に農家の方は農薬を無頓着に使っています。農薬の恐ろしさをほとんど知らないのではないかと思います。航空防除は全国の地方自治体の約3割で実施されています。今農薬を推進する関係者の方々は、今の農薬は安全だと豪語します。もしそうであるならば、残留性が低いと言うならば、なぜこの航空防除を朝早くやるのですか。正々堂々と昼間やったらどうですか。かつて鹿児島県内で女子高校生3人が朝トレに出かける途中、航空防除に出くわして急性中毒で倒れ救急車で運ばれました。どこが安全なのです。

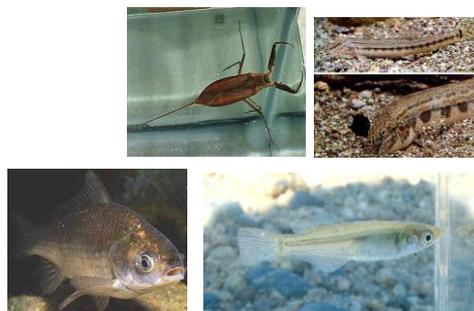
よく私は農家からこんな質問を受けます。「先生何故農薬を使って悪いのか。人間だって病気になったら薬を飲むではないか。何で作物や家畜も病気になったら農薬を使ってはい

けないのか」と言います。私はこう答えます。「問題の本質が少し違うのではないのでしょうか。人間が薬を飲むというのは自分の自己管理の問題で責任は自分にあり、他には迷惑をかけません。ところが農薬をふると、それが水に溶けて流れていき、川、池に流れ、地下水に浸透し、最後は海に流れていく。つまり他人に迷惑を及ぼすというのが農薬なのです。だから問題の本質が違うのです」。ところでカレーライスに農薬を混ぜたら捕まるけど、田んぼや畑で使っても捕まらない。一体これはどう考えたらいいのでしょうか。私は農薬を使わない考え方で若いころから生きてきました。これだけは1回も曲げたことはありません。当時、相当袋叩きにも会いましたし、村八分にもあったわけです。でも、農薬を使わない考えだけは通してきました。それがあったから、私は必然的に古野隆雄さんに出会ったのです。偶然というよりは必然だったのです。

ミジンコをご存知ですね。田んぼの水をすくって見ると、体長が約0.5～1mmですから肉眼で見えます。これに除草剤を少し入れてみると、あっという間に消えて死んでいきます。ミジンコは動物プランクトンで、魚たちのエサです。プランクトンが減るということは小魚たちが減るということです。小魚が減れば中魚が減り、大魚が減ります。それを食べる鳥たちも減っていきます。農薬が動物プランクトンを殺していることで、生き物の全体の生態を乱しているのです。



### 田んぼの生き物たちが消える



かつて田んぼにいたタガメとかドジョウとかフナやメダカが農薬によって消えていったということではないのでしょうか。今日本の水田はシーンと静まりかえっています。不気味です。かつて賑やかだった田んぼが静まり返っています。1つは人間がいなくなったことがあります。生き物たちがいなくなっているのです。こういうことには消費者の方はあまり目を向けません。消費者の方々は農薬が入っているか入っていないか、食べ物が安全であるかないかの基準だけを考えて、生き物たちが悲鳴を上げて死んでいっているということにはあまり関心がありません。

野生のコウノトリがいなくなりました。兵庫県但馬地方でかろうじて増殖センターで飼われているにすぎません。そして最近野生化試験が始まっています。同じくトキです。佐渡島でトキは絶滅してしまいました。今佐渡島でトキを放して野生復帰を始めています。でも中国のトキで、決して日本のトキではありません。このことをマスコミはあまり報道しません。農薬によってトキを殺してしまったという反省が無いからです。中国のトキで

日本のトキを増やそうとしていることをもっと考えてほしい。もっと反省をしてほしいと思います。

ものすごい量の食品添加物が使われています。ある人が計算してくれましたが、日本人は1日に1人当たり平均11gとっているそうです。1年間に一人当たり約4kgの食品添加物を食べていることになります。食品添加物は安全ですかという質問をよく受けます。私は本当の所は分かりませんと答えます。例えば安全性の基準を設けて厳しい検査をして認可をしていると行政側は言いますが、それはマウスやラットの実験です。安全テストはすべて委託の会社に任せてマウスやラットを使って検査します。その結果を人間の体重比に換算して安全基準を決めているにすぎません。果たしてマウスやラットが本当に人間と同一なのかという問題もあります。さらには単味試験で複合試験はやらない。複合というのは、我々はいろんな食品添加物を毎日体に取り込んでいます。それらが身体の中で合成されたり分解したり、いろんな化学反応を起こしています。そういう意味の複合の安全性は全く問われていません。もう1つは子孫に伝わっていく遺伝毒性ですが、遺伝毒性についても十分な安全テストは行われていません。だからそもそも安全ですという安全テストに問題があると思っています。ほとんど信用する事が出来ないというのが私の本当の気持ちです。そして何年か許可して使ってヤバくなったら取り消していくということを繰り返してきました。20年間くらいは人体実験をしないと分からないので、みんなで今人体実験していると考えた方がよいのではないのでしょうか。

次は表示偽装問題です。テレビのニュースで会社のトップが出てきて、謝罪する映像を何度も見かけます。何とも気分が悪いです。正直、この人達は心の中で本当に反省しているのかなと私は疑っています。ただ頭を下げて謝ればよいと思っているのではないか。食べる側の人達は、約9割近くの人達が今の食べ物は怖い。何を食べてよいのか分からない。スーパーに行って何を買って良いか分からない。何も信用できない、表示ラベルが付いているからといって信用できないというところまで来ています。完全に食べ物の安全性が崩壊しました。

次に農業と農村はどうなっていったのか。第1次産業の就業者は右肩下がりです。逆に第2、第3次産業、とりわけ第3次産業が急速に伸びてきています。農業就業者は約3%以下になってきています。もう少数民族です。失礼ですが、絶滅危惧種に近づいてきています。私もその1人です。わが国の総生産額の中で農業生産額はわずか2%、データの取り方で少し違いますがほとんどマイナーな産業です。我々はこのことをしっかり自覚しておかなくてはなりません。

図2 農業就業人口の激減

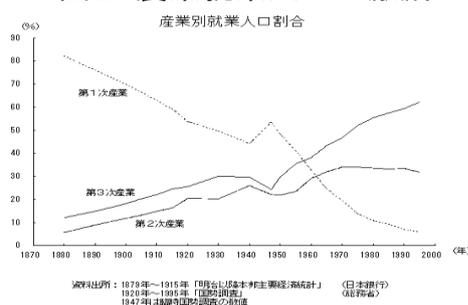
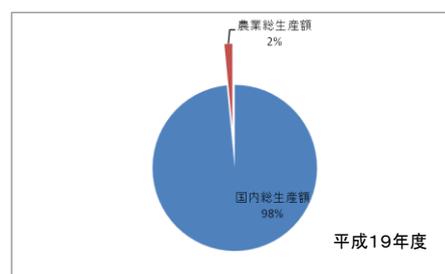


図3. 農業はマイナーな産業



農村の人口ピラミッドをみると、かつて 20～30 歳代と 60 歳代あたりに 2 つのピークがあり、この 2 つのピークでバランス良く保っていたのがかつての農村でした。それが、平成 7 年には 65 歳というところにしかピークがありません。1 つのピラミッドになり、これがもっと右に進んでいけばいずれ消えていくということです。つまりいずれ村は消えていくところまで今きています。これもデータの取り方で難しいですが、大雑把に言うと、今都市に住んでいるのは 8 割です。農村に住んでいるのは 2 割です。これが進めば日本列島は都市だけが残る。農村は消える。果たしてこういう国が存在するのか、成り立つのか。本気で我々日本人は考えているのでしょうか。

図4. 農村人口の構造

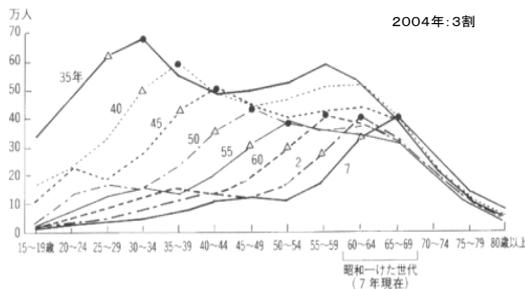
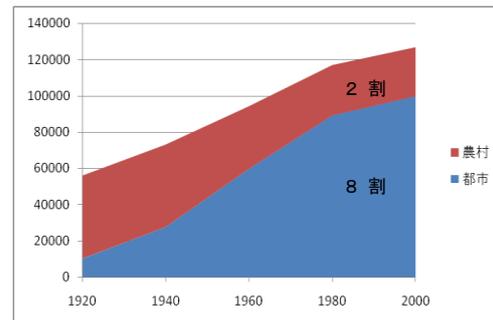


図5. 地域は過疎と過密に2極分解



私は鹿児島県の山里に住んで 6 年経ちます。私の思っている集落の印象を皆さんにお話ししたいと思います。まず、久しく赤ちゃんの泣き声がしません。赤ちゃんの泣き声を聞いた事が無い。家畜の音がしません。私はもともと畜産が専門です。庭先に鶏がいない。みんな飼っていない。今、農村でも鶏公害が出る。鳴き声がうるさいと言われるようになっている。とにかく家畜を飼わなくなった。無畜農家が増えてしまった。魚釣りやトンボを追う少年の姿はない。戸外で遊ぶ子供達もいない。お葬式が多い。私の所は集落でお葬式があると 1 世帯から 1 人が出て、2 日間みんなで助け合うという制度が残っています。夫婦のどちらかが亡くなり、1 人が残るという独居老人が増えています。廃屋も増えている。鹿児島県の中でもまだ私の住んでいる所は比較的恵まれた方の農村だと思っていますが、そこでももうそのような状況になっていっています。

田んぼや畑で働いているお年寄りの後ろ姿を見ると、私は涙が出そうになります。この人だって子供がいたのだと思います。子供の幸せを思うと、本当は一緒に住みたいけれども都会に出て行けということだったと思います。本当は孫とも住みたい。でも、孫の幸せを考えたら帰ってくるなということだだと思います。そして毎年小さな田畑で作物をつくり、それを宅急便で送っているのではないのでしょうか。じっと寂しさに耐えながら子供たちの幸せを願っている。礼儀正しいお年寄りがかつての日本人ではないのでしょうか。かつての日本人が今のお年寄りの中にいるのです。私は本当に涙が出てきます。私はこのお年寄りたちをいじめている今の社会に心底腹が立ちます。年金問題から始まって、なぜお年寄りたちの肩身が狭くなるような事を今の世代の人達はするのですか。自分達の負担が増えると言って。その前にありがとうと言うべきではないですか、お年寄りたちに。本当に腹が立ちます。

いよいよ話の本論に入ります。では、農業と農村はこのままで良いのか。批判して嘆いているだけでは何も意味がありません。農業や農村の将来を本当に思うなら、どうしてこんな事になったのか。私達を追い詰めたものは何か。強い向かい風の震源地を探らなければいけないと思います。今これをやらないですよ。マスコミの方が勿論責任が重いと思うけど。さっきのトキが減じた原因も言わないのと同じように、なぜこのような状況になったかということを追わずして、何が次の将来が見えてくるのでしょうか。人間は病気になったら、病気の原因を突き止めて的確な治療をしていきます。同じではないですか。日本が病んでいるなら、日本の農業農村が病んでいるならその原因はどこからきているのかです。

その1つはアメリカ側から吹いてきている。向かい風がアメリカ側からなのだと言いたい。第1次、第2次大戦を我々人類は体験しました。その時アメリカ国土は一度も戦場にならなかった（真珠湾攻撃というものを除いては）。一度も戦場にならなかったのはアメリカ大陸です。そして、戦争で燦々たる状況になったのはヨーロッパであり、アジアです。この間アメリカは何をしたかという、せつせとミシシッピ川流域を開発しました。そして穀倉地帯をつくりあげて、ガンガン生産して、第1次、第2次大戦で食糧不足になっている国々に輸出してドルを稼ぎました。アメリカが富める国になったのは工業だけではないのです。農業によって富める国になっていったのです。農産物で外貨を稼ぎ大国になった。ミシシッピ川流域を世界のパン籠といわれる穀倉地帯を作り上げました。

ところが第2次大戦が終わるとどの国も反省をします。そして食糧増産に入るわけです。日本もそうでした。そうするとアメリカの農産物が売れなくて余るので、余剰農産物の処理が大きな課題となりました。余剰農産物を倉庫にしまっておくだけで倉庫料がかかる。アメリカにとって深刻な問題を抱えてしまう。そこでアメリカは頭が良いのでどんな戦略をとったかという次のようなことです。

第2次大戦後の世界は冷戦構造となりました。つまり社会主義国と資本主義国の対立が深刻になりました。このような情勢の中で、アメリカは余剰農産物の処理をうまく軍事とつなげようとしたわけです。

昭和29年に余剰農産物処理法をアメリカは作り上げました。同じ29年に日本との間に日米相互防衛協定が結ばれます。これがいわゆる悪名高きMSA協定と言われるものです。MSA協定とは、簡潔に言えば、日本はアメリカの余剰農産物を円で買えるという優遇処置をとってくれ、受け取った円でアメリカは日本への防衛援助をするという協定です。見事ですね。見事な戦略というか、知恵です。一举両得です。アメリカは余剰農産物を処理し、日本にも軍備を強化してもらおうということになります。それから和食から洋食へ日本人の胃袋を変えようと。そうすればお米が減ってパンが増えてアメリカの余剰小麦を処理できるという戦略をとってきたのです。その際に日本の子供達を狙ってきた。頭が良いですよ。いずれ大人になって結婚し、子供をつくり、家庭をつくるから、子供達を変えようという戦略をとってきて、学校給食の援助を始めます。私の小学校の頃、昼食の時間になると、先生が一番前に座って食べます。脱脂粉乳とパンを。脱脂粉乳は美味しくないので食べない子供が多かったのですが、食べないと廊下に立たされました。そういうふうにして学校ぐるみで我々の子供たちの舌を変えていきました。

キッチンカー大作戦といって、アメリカは 12 台のキッチンカーを日本に援助しました。このようなキッチンカーが全国日本列島を走り回りました。放送設備も完備したものでした。そして専門家をつけ、栄養士をつけ、時には栄養学者にも講演させて、日本中で米を食べると頭が悪くなるとか、米を食べると脚気になるとか宣伝しました。これが学校給食です。コッペパンと脱脂粉乳で育てて、日本中の子供たちの舌を変えていきました。見事です。

さらに昭和 40 年代になってくると、余剰トウモロコシの処理を考えて日本の畜産が標的になります。関税定率法を日本につくらせて、餌にするトウモロコシを輸入する際は関税を“ゼロ”にさせました。いまだにそうです。だから安いえさで日本の畜産は発展していきました。このようにして飼料輸入依存型の畜産が見事にできあがりました。今、我が国では配合飼料を年間 2400 万 t 製造していますが、その原料は輸入穀物です。日本のお米消費が年間約 800 万～1000 万 t として、その 2 倍以上の穀物が関税“ゼロ”によって日本に入ってきていることになります。

いよいよ平成時代に入ってくるとお米です。日本の農業の本丸が狙われて、部分自由化が始まりました。これは細川内閣の時です。12 月 14 日、赤穂浪士討入の日にやりました。私はこの日焼酎を飲んで、日本の農業は終わったと思いました。本丸の外堀がつぶされたのですから。

もう 1 つは日本からも向かい風が吹いたのです。戦後、日本の経済復興は、工業立国とし、輸入原料で工業製品をつくって、それを輸出して世界の先進国と競争するという方針を立てました。そのためには安価な工業製品で勝負するしかなかった。その後同じことを韓国もやり、中国もやりました。安い価格で勝負するには、働く人たちの労賃を安くする。そのためには働く人の食生活の食費を安くしなければいけない。そのためには安い農産物を輸入する。これが基本的戦略でした。そしてお金がないから軍事費はかけたくない。それは米国に依存する。アメリカの傘のもとに生き延びていくという方針をとりました。これが日本の戦後の基本戦略です。したがって日本の農業と農村は衰退していくということは火を見るよりも明らかだったのです。このようにアメリカと日本の利害が一致して、戦後の産業構造が確立したわけですから、農業の状態が今こんな事になったことは驚くことではありません。当然の帰結です。

さらにその向かい風に乗ったのが昭和 36 年に制定された農業基本法です。忘れもしません。36 年は私が大学に入った年だからです。その年の春、国会は荒れて、乱闘国会でした。覚えていらっしゃるでしょうか、私より年上の方は。池田内閣です。「貧乏人は麦飯を食え」で有名になった池田内閣の時に農業基本法が成立するわけです。農業基本法は果たして日本の農業を守るのか。衰退させるのか。国論は真二つに分かれました。大激論の末、乱闘国会で議長席に野党の人達がかげ登って行って、つるしあげにしてという映像を今でも覚えています。そうやって農業基本法が通りました。池田隼人の署名入りで農業基本法が交付されます。

農業基本法を一言で説明するのは難しいですが、簡潔に言えば次の通りです。

従来の農業は零細であるので規模拡大を図らなければならない。当時 3 反百姓でした。それを少なくとも 1 町歩にする。そして多角経営は非能率的であるので、単一経営にしな

ければならない。米は米だけの農家、畜産は畜産だけ、畜産でも牛は牛だけ、牛の中でも繁殖は繁殖牛だけ、肥育は肥育牛だけやりなさいと、豚も繁殖は繁殖豚だけ、肥育は肥育豚だけ、鶏も産卵は産卵鶏だけ、鶏肉はブロイラーだけという方針をとりました。また従来は多労働型であったので、省力化を図ること。そのためには化学肥料、農薬、機械化、施設化を進めていくことを徹底しました。そして自給型から商品型の農業を推し進めました。

農業基本法はそういう方向性で今日まで展開されてきました。そこで農業基本法には何が欠けていたかを私なりにお話ししたいと思います。農基法では農工間格差の是正と言いましたが、所得格差をなくすことには私も大賛成です。工業の労働者と農家の所得格差をなくすことは大賛成です。でも、何もかも一緒にして農業と工業を同じ土俵にして、工業に追い付くことが農業の近代化と考えたのは誤りだと思います。だから農の本質が欠落してしまったのです。農業の産業化と言ってきましたが、生活の視点が欠落してしまいました。自給を放棄するというのはその象徴です。そして機械化、化学肥料化、農薬化をすすめていく。環境への配慮は全くなかった。無いどころか農薬は神様だと、農民を救ってくれる神様だという考えが広まって、環境へ負荷を与えることを当時は考えもしませんでした。単一経営を進めると物質循環が欠落していきました。当然です。水田で米をつくって稲わらが出てくるのに、前は牛がいたから牛にやれたのに牛がいない。今度は牛の糞が無くなって肥料が不足し、買ってくるしかない。物質循環がずたずたにされていきました。そして農業の専門化と言って兼業農家をバカにし、兼業農家を差別してきました。兼業農家は劣等生であると。そんなことはないと思います。それはまたあとでお話します。結局、政策の中に農業の視点はもっていたけれども農村の視点はありませんでした。農水省の中に農業政策は展開するが農村政策は出さなかった。だから今、農村がこんな状態までできている。気がついたら遅いというところまできたのではないのでしょうか。

以上のような震源地から発する強い向かい風から私達は目をそらすことはできません。この向かい風に向かって追い風をどう起こすかが今我々に問われているのではないのでしょうか。

新しい追い風のために奥底で考えておいた方がよいなと思うことを申し上げます。人間はどこまで発展すれば気が済むのか。これからの農業、農村を考える場合の前提の前提の話です。宇宙までいくのか。宇宙開発を今盛んにやっていますが、地球を汚して徹底的に地球を破壊して、次はみんなで宇宙に逃げるのですか。どこまで人間は突き進むのですか。遺伝子の組み換えで新生物をつくるのですか、この世に無かったものを。人間は何でそこまでしないといけないのですか、という疑問です。原子力エネルギーはクリーンなエネルギーだと言って騒いでいますが、でもこれはまさしく危険と隣り合わせのエネルギーです。そんなことまでして原子力エネルギーを開発しなければいけないのでしょうか。

私はよくミャンマーに行きましたが、かつてのビルマですが、こんな話を聞いた事があります。ビルマがイギリスの植民地だったころの話だそうです。イギリスの人達は、ビルマ人がロンジーという長い腰巻をはいて、それをいっこうにズボンに変えようとしなないのを見るわけです。かたくなにロンジーをはいているビルマ人を見てイギリスの人がビルマは発展しない国だと、なぜなら長いズボンに変えないからと。それを聞いたビルマの長老

がなぜこれ以上発展する必要があるかと聞いたそうです。話では、イギリス人は何も答えられなかったということのようでした。

もう 1 つ奥底で考えておいた方が良いのは、経済発展が人間のすべてだろうかということです。現代の不況を騒いで、みんな景気回復できる総理大臣を求めています。景気回復できるリーダーをみんな求めています。具体的にはもっと内需を拡大していこうと、そうすれば景気が回復するというやり方です。ということは地球をもっと汚すということです。もっとエネルギーを使うわけです。定額給付金が出ました。あれで内需拡大を図ろうというのであれば、地球をもっと汚しなさいということをやっているわけです。不景気になるということはエネルギーを使わない分、地球が蘇ってくることを意味しています。産業を起こせば良いのか。産業を起こせば発展であり豊かであるということになるのでしょうか。人間の幸せや豊かさは一体何なのかを我々は真剣に考える必要があるのではないかと思います。人間社会の基本は本当に競争原理だけなのではないでしょうか。

農の新しい追い風を起すにはどうしていけばよいか。はっきり言って私も特効薬はありません。分からないですけれども、今考えていることを紹介して終わりたいと思います。

考えていく糸口は、農業基本法に欠けているものを紐解いてみたら良いのかもしれない。例えば農工間格差の是正ということは農業の本質が欠落している。選択的拡大、単一化は物質循環が欠落している。機械化、化学肥料化、農薬化は環境の配慮が欠落している。農業の産業化は生活の視点が欠落している。農業の専門化は兼業化その他を否定している。農業の視点というよりも農村社会の視点が欠落している。以上のようなことを私は先ほど述べました。実はこれからの新しい風を起こしていくヒントがこの中にあるのではないかと思います。

農の本質の問題です。農は人間が生きる根源的なものです。当たり前のことです。食べ物が無ければ人間は生きていけません。NHK の記者がフランスに取材に行って農家を回ったら、フランスの農家から日本は工業発展して素晴らしい国だとほめられる。でもテレビは食べられないからと皮肉を言われる。フランス人は農業に誇りを持っている。基本的には食べ物が無いと生きていけないという根源的な問題です。

農というのは、命を育み、その命をいただく行為です。作物や家畜を、その命を育てていくのであって、それをつくるのではないのです。命は作物が勝手に組み立てていくのです。我々が出来るのはそれをそっとそばから支えてあげて、その命を育てていくということです。だから本当は傲慢にはならず極めて謙虚な人間になるはずで、そして、最後に人間はその命をいただく。あなたのいのちをいただきますと感謝の気持ちが出てきます。これが農の営みではないでしょうか。農は大自然の恵みをもろに受けて毎年我々は食べ物を頂ける。一方で大自然の脅威もある。我々南九州の農家は台風が頭から離れません。毎日天気図とにらめっこです。こうして大自然の脅威もありますが、一方では大自然の恵みを受けながらやっているのが農業ではないでしょうか。

農は単なる工業化ではないと思います。かつて私はこれですぐいぶん叩かれました。萬田は古いとか、萬田は農本主義者だとか、農業の工業化ではないと言えば大学で村八分に会いました。農は再生産型の営みであり、永続的です。工業は石油という資源を掘ってきてそれを精製していく。それを我々の生活必需品に変えていくわけです。でも 2 度と石油は

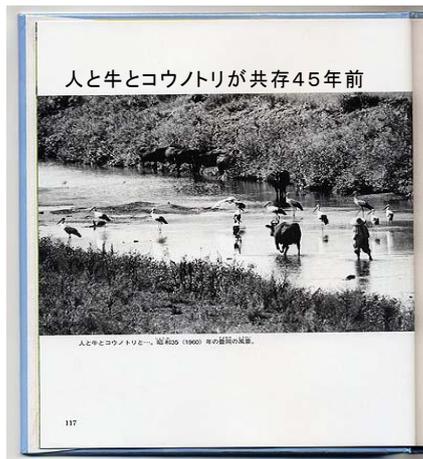
作ることはできない。だから工業は消費型産業です。ところが農業はここに米があればその米は蒔けば芽が出て再び米がとれます。小麦も大豆も一緒です。再生産型です。家畜もそうです。本来、鶏の卵は受精卵ですがその受精卵を孵化させればヒヨコがうまれて再生産できる。こういうふうにして、農業は再生産型産業ですから、その国で出来ないということはない。最初は種が無ければ輸入し、あとはその国で出来る。工業はそれが出来ない。ここに農業の強みと素晴らしさが潜んでいます。

農というのは共同体社会の中にある。決して一人でやっていけないものではない。村というものの中でみんなと助け合って、1年間いろんな共同作業あり、その中でその村を守り、それぞれの農がある。それを専業農家だけ拡大していけば、その人達が村を守れますか。共同体社会は成り立つのでしょうか。ここを農業政策では考えていない。規模拡大して、足腰の強い外国に負けない大規模農家を育てたら良いとすれば、ますます農村は衰退していくと思います。

農というのは地域性がある。立地条件は様々です。それぞれの地域でそれぞれの農業がある。これを普遍化し、一般化しようというのは戦後の農業普及です。国と県が進めてきた普及技術はどちらかというと画一的な物です。選択的拡大というのは農の物質循環が欠落していたわけですが、農の物質循環はとても大事なことです。そして小さな循環ほど地球に優しいです。単一化を図ったものだから、単一農家同士をつなげて地域間で循環すれば地域循環と言いますが、もっと言えば1農家の中に循環がある方が良い。輸送にかかるエネルギーを使わなくて済みます。自分の中でぐるぐる回していく循環ほど良い。もう一度小さな技術というかそういうものを見直していかなくてははいけません。

それから有畜複合経営ということをもう1回よく考える必要があります。個別的に、どうしてもというなら地域の中でもよいですが、必ず作物と家畜という関係があることで循環が実に見事に出来る。それを全部断ち切ってきた。食と農の物質循環をどう作り上げていくか。つまり食品工業残渣物や残飯をどういうふうに我々は利用して農業の中で活かしていくか。そしてそれをまた食べて、残った残飯がまた返ってくる循環をどう作っていくのかということなのです。

食の安全性です。日本の田園にいる生き物たちは、人間が育んだものです。耕作放棄地ができると田園の生き物たちも消滅していきます。田園の生き物たちは人間の農の営みの中で培われてきたものですから。田園の生き物たちを復元できるかが我々の肩にかかっています。コウノトリ、トキの野生復帰運動は象徴的なものです。果たして実現すると思いますか。但馬地方のおばあちゃんの家への押し入れの中にあつた有名な写真があります。川で人間が牛の体を洗っている、傍にはコウノトリもいるという写真です。このような関係を果たして我々は取り戻すことができるのでしょうか。気の遠くなるような話です。



鹿児島県霧島市溝辺町 竹子の里

生活の視点が重要です。生活することは家族の命を守るということです。私達の基本は家族だと思えます。そして次は村がある、集落がある、そこに必ず小学校がある。これが人間の幸せの基本です。家族の命を守るためには、絶対に安全な食べ物を確保しなければなりません。だからよく農家の中に、市場に出すのは農薬を散布したものを出すのが、家族が食べるものは農薬を散布していないものを生産すると自慢げに話す人がいますが、本当は統一した方がよい。

相互扶助の精神ももっと出てくる。お互いに生活をしているから暮らしを支えあつていくと、物のやり取りもたくさんありますし、いろんな隣近所の関係は生活の視点からたくさん出てくる。それが地域に生きるということではないでしょうか。地域に生きるということは産業化を図るために生きているわけではない。家族がその地域でどうやって生きていくかということです。だから生きていくためには兼業をして良いのです。兼業の何が悪いのですか。生活の視点に立ったら当然です。役場に勤め、農協に勤め、地場産業に勤めて一方で農業もすることの何が悪いのですか。家族の労働力を他産業に従事して農外収入を得ることは悪いことではありません。

菜園家族の本を出したのが滋賀県立大学の太田先生です。菜園家族というのは面白い本です。3世代の家族が中心となって1週間のうち5日は里山で菜園を営み、残る2日間はワークシェアリングで従来型の仕事をして給与を稼ぐ。例えば役場に勤める場合2日間勤める。そうすると3人勤められる。役場の職員を3倍に増やすことが出来る。今役場の職員は減らそうとしています、この考えでは増やすことが出来る。実は、富山にある有名な大企業ですが、網戸、サッシの企業が農村地帯に工場をつくり、初代の社長は周辺の農家を雇い、1週間のうち半分出てきてください、半分は農業に勤しんでくださいと、だから当然給料も半分という方針でやっていました。その結果、農家もそれは良いということが分かって、今も続いて、これからもその方針でやっていくそうです。ある意味でワークシェアリングです。半農半Xということをお願いした人がいます。塩見さんという方です。半農半Xも似たようなものです。

農の再生の視点は5つくらいあると思えます。1つは、我が国は残念ながら半独立国だと

思います。それからどう抜け出すかが問われていると思います。今普天間基地問題がありますが、私から言わせれば日本に約 130 もの基地がおかれ、いまだにアメリカ軍が日本に在留して、犯罪を犯してもすぐ捕まえることが出来ないような国がなぜ独立国なのか。普天間基地移転の問題よりも、そもそも米軍が日本に来ている問題を今問うべきなのです。このことから問題を始めないと普天間基地を部分的につきはぎだらけな対応をすることはうまくないと思います。堂々と今の時代になってアメリカ軍が日本に駐留する必要があるのかと、必ず反論として北朝鮮問題を出してきますが。本当の意味で独立、中立な日本をどうやってつくっていくかが、農業、農村の再建に係わっています。無関係ではない。2つ目が市場原理、競争からどうやって抜け出すか。もう少し共生とか知足の視点に立つことは出来ないのでしょうか。

暮らしの視点に立って物を見る。そういう意味で生活農業論が出てくる。暮らしの中に農を取り入れるということでは国民総動員という物騒な言葉を使いましたが、別の言葉でも良いのですが、もっとみんなが農業をやっていく時代をつくっていくということです。そして環境に配慮したいいわゆる環境共生型農業を我々は目指していく。

20世紀の価値観の市場原理は欲望が元にある。知足というは足るを知る。少し欲望を抑えていく。そういうことを基本にしながら、共に生き循環を大切にしていける社会を目指すことができるかどうか。今こそ理念を変えていくことが本当は問われている時代ではないかと思えます。生活農業論の視点というのは、産業市場主義ではない。半農半Xもこれに入ってくる。菜園家族も同じ。ワークシェアリングもそうです。共同体社会という村を我々はもう一度取り戻していけるのか。

暮らしの中に農ということでは、自給自足の大切さもきちんとしていく。中小家畜をもっと大切にされた方が良いのではないか。日本人にとって鶏、山羊、豚くらいは飼えるのです。本当に飼うべきです。子供達に飼わせるべきです。お爺ちゃんやお婆ちゃんに飼ってもらうべきです。そうしたらお爺ちゃんやお婆ちゃんも存在感が出てきます。ゲートボールと旅行ばかりさせていたら早死にしますよ。家族の中にまだ自分の存在感があることが長生きの秘訣だと思います。もっと家族の力をいかせば、家畜も飼って、お客さんが来れば庭先の鶏をつぶして、御馳走にだすとかそんなことくらいできる話です。

資源の循環をとり戻していく。台所から出たものはみんな鶏や豚が食べてくれます。農は他人に任せるのではなく、自ら少しでも何かを作る、自給自足的に。それが環境を優しくしていくこと。自分の庭の芝生をはがして、畑にして野菜をつくる。庭の片隅に小さな鶏小屋をつくって鶏を4、5羽飼う。毎日卵がとれて朝美味しい卵が食べられる。台所の残飯はすべて鶏に与える。そういう農業をとり戻していけば、都会に人間が偏在化していくような時代も終わる。もっと都会と農村のバランスが取れてくると思えます。

環境共生型農業というのは、農薬を使わない、化学肥料は最小限にする、ビニールハウスも最小限にする、生物多様性を考え直す、有畜複合経営を目指す、合鴨農法は単なる除草法ではありません。水田で有畜複合経営をするという農法です。小規模農家が増えていく。1戸で3万羽養鶏をするよりも、1戸で300羽飼えば、100戸に増える。1戸で2000頭やっている養豚家をやめて10戸でやれば、1戸200頭位になる。農家をもっと増やせるわけです。

この写真が今住んでいる私の山里です。私の田んぼは右の方です。家は私の母屋です。田植えの終わった田んぼです。きれいです。水がはられた田んぼは本当に美しいです。

ささやかな追い風が吹き始めている。まず国内農業を見直す機運は間違いなく高まってきています。それは皆さんも感じられていると思います。異常な食糧自給率の低さに気づき始めた人たちがいるということです。

有機農業推進法が制定されました。これにはいろんな論議がありますが、うまく活用すれば追い風になることは間違いありません。農的暮らしや定年帰農者が間違いなく増えています。かつての農への軽蔑ではなく、若者たちが農へ憧れを感じ始めています。今の学生たちは農にあこがれています。我々の時代の学生は軽蔑していました。今の学生たちは有機農業をやりたいというのが圧倒的です。合鴨農法をやりたいというのは多いです。地産地消、産直、小さな直売所が市民権を持ち始めています。すでに新たな流通が始まっています。

皆さんはこのような追い風を感じ取ることが出来るでしょうか。

私が即効的に作った詩です。へたくそな詩ですが、思いだけ分かっただけであればありがたいと思います。

### 私の夢見る村

清らかな水と美しい自然に囲まれた山里で  
いつも太陽や自然の恵みに感謝し  
日々平穏に暮らす家族がある  
そこには小さな小学校と集落があり  
専業、兼業、非農家を問わず、老いも若きも  
小さな農家も大きな農家もともに助け合い  
結いの心が残る村がある。



鹿児島県霧島市溝辺町竹子 宮川内集落にある萬田農園